

# COVID-19 と人名

川 浦 康 至

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の社会的影響の1つに人の名前がある。新生児にコロナ関連の名前を付けた事例が報じられる一方で、コロナ関連の名前を持つ人の否定感情も報じられた。それらのようすを報道記事で見ていこう。

## 祈りを込める

2020年3月23日、インドのニュース・テレビ局「NDTV」([www.ndtv.com/](http://www.ndtv.com/))で、「協調のシンボル」(Symbol of unity)と題するニュースが流れた。モディ首相がインド全土に外出禁止令を出した日である。

インド北部のウッタル・パラデーシュ州に生まれた女の子に、叔父が「Corona」と命名した。「ウイルスはもちろん危険で、世界中の人々の命を奪いました。しかし同時にたくさんのいい習慣ももたらし、世界規模での連帯を強めました。この子は災禍と戦う人々の絆のシンボルになるでしょう」と命名動機を語る。

インド発が続く。『ニュー・インディアン・イクスプレス』の2020年4月1日付け記事だ([www.newindianexpress.com/](http://www.newindianexpress.com/))。

「COVID とコロナに立ち向かう：ロックダウン中のチャッティースガル州で双子の誕生」(Meet Covid and Corona-twins born during the lockdown in Chhattisgarh)。

チャッティースガル州に住むヴァーマ夫妻は、生まれた双子の女兒に「Corona」、男児に「Covid」と命名した。母親のプリーティさんが命名の経緯を語る。

「いま COVID-19 に対する心配が渦巻いています。私たち夫婦は、新型コロナや COVID-19 という言葉にまつわる人びとの不安と恐怖をやわらげ、そして記憶に残すべき日にしたいと思い、夫と相談して決めました。実際、ウイルスは危険ですし、生命の脅威です。しかし、爆発的感染は衛生観念や清潔の重要性を教えてくれました。その他にも多くのよい新たな習慣を作り出しました。そう考えて名前をつけました」。

父親が、カタールの衛星テレビ局「アルジャジーラ」の4月4日付けのインタビューに次のように応じている ([www.aljazeera.com/](http://www.aljazeera.com/))。

「2人の名前はそれ自体とても美しく、しかもコロナはラテン語で王冠を意味する言葉です。私たちはコロナによるこの名前まつわる恐怖を終わらせ、大勢の人が公衆衛生や衛生

問題に関心を持ってくればと願っています」。

外出禁止令が出て、しかも真夜中の12時とあっては車が拾えない。夫のビナイさんは妻をバイクに乗せ、検問に引っかかりながらもなんとか病院に到着、無事出産したという。

病院で子どもたちが「Corona」「Covid」と呼ばれるのを耳にしている間に気持ちが動いたのか、今回のパンデミックが収束したら、名前を見直すかもしれないと夫妻は語ったという。

インドは改名が容易なので、そのことも今回の命名を後押ししたのだろう。さらにインドには「個人名は、できるだけ直接呼ぶのを避ける習慣」(松本脩作・大岩川 嫩(編)1994『第三世界の姓名』明石書店)があるため、コロナあるいはコヴィッドと呼ばれる機会は実際には少ないかもしれない。

コロナにちなむ命名のニュースはその後も続いた。

「コロナちゃん、ロックダウンくん。新型コロナウイルスにちなんだ命名が物議を醸す」([www.elle.com/jp/](http://www.elle.com/jp/), 2020年5月5日)。記事には、インドとフィリピンの2例が紹介されている。

3月、インド南東部の病院で同時期に出産した女性2人が、それぞれ自分の子に「Corona Kumar」「Corona Kumari」と名付けた。どちらも医師の提案だという。「コロナと名づけることによって、意識向上に役立つかもしれない」と考えてのことだったが、提案が受け入れられたことに驚いたらしい。ここでのKumarとKumariは性別を示すミドルネームで、それぞれ男子と女子を意味する。

フィリピンの事例は、娘に「Covid Marie」と名づけた家族の話である。COVID-19は「世界的に苦痛を引き起こしたが、それだけでなく喜びももたらしてくれたことを思い起こさせる名前にしたかった」と、父親は語る。インドでは数千キロ離れた病院に行く途中で何度も足止めを食らった末に生まれた息子を、家族は「Lockdown」と命名した。「辛い時期に直面したすべての苦難を記憶するため」と動機を語った。

「物議を醸す」との見出しから想像されるように、この記事は一連の命名を危惧する。彼らは「長期的な視野を持ち合わせていないのかもしれない。SNSでは多くの批判が寄せられ、物議を醸した」「彼らは将来の結果について考えたのだろうか疑問。コロナちゃん、ロックダウンくん、コヴィッドちゃんが数年後には、8歳のコロナくんと同じようなあざけりを経験しないことを期待する」。

どんな名前であれ、名前を嘲笑対象とすることのほうが問題であるのに、それを批判することなく、最後の一文が書かれている。冷たい。

コロナ絡みの命名は、きっかけ自体は個人的出来事であっても、名前が社会的記憶装置でもあることを思い起こさせる。

## 連日呼ばれたらたまらない

「トム・ハンクスさん、「コロナ」の名前でいじめられた少年に手紙」

2020年4月24日配信記事の見出しである (bbc.com/)。記事の内容を紹介しよう。

コロナという名前のせいでいじめられたというオーストラリアの8歳の少年が俳優のトム・ハンクスに手紙を書いた。

ハンクスは3月、プレスリーの伝記映画の制作でオーストラリアに滞在、その間、新型コロナウイルスに感染した。妻とともに治療を受けていた際、Corona De Vries という名前の8歳の少年からお見舞いの手紙が届いた。

体調を問う一文で始まる手紙には、学校でみんなが僕のことをコロナウイルスと呼ぶと書かれていた。「僕は自分の名前が好きですが、コロナウイルスと呼ばれるたびに、とても悲しくなり、腹が立ちます」。ハンクスは愛用のスミス・コロナ社製タイプライターとともに、以下の返信を送った (抜粋)。

親愛なる友人のコロナ君。

君から手紙をもらい、妻も僕もとてもうれしく思っているよ。最良の友になってくれ、ありがとう。

君は僕の知っているなかでただ1人、コロナという名前を持つ人。コロナには太陽の周りの輪、王冠という意味がある。

このタイプライターは君のためにあるようなもの。僕がゴールドコーストに持っていったもので、それが今また戻ってきたというわけさ、君のもとに。使い方を大人に聞いて、これで返信を書いてくれるかい。

手紙の末尾には、手書きで「追伸！ 君はともだち！」(PS! You got a friend in Me!) と添えられていた。You got a friend in me は「トイ・ストーリー」の主題歌の歌詞だ。タイプライターを手にし、少年は「僕と同じ名前だ。すぐに返事を書くよ」と取材に答えた。

日本では、こんなニュースが報じられた。以下は、2020年9月27日の記事の抜粋である (東京新聞)。

『『ころな君』、負けないで 名前に悩む8歳に応援歌』

青森県の小学2年生、村越光冠 (ころな) くん。フェイスブックを通じて彼の苦悩を知った長野県警 OB 山田文大さんたちが今月、村越くんを励まそうと歌った歌を CD に録音して贈った。県警では子どもの安全対策を担当、「胸が痛み、子どもを守らなければという現役

時代の気持ちがよみがえった」と語る。

「光冠」は太陽の周りの光の輪，コロナに由来する。父方の祖母がメキシコ人で，メキシコでも呼びやすく，明るく元気な子になってほしいとの両親の思いが込められた名前だ。新型コロナのニュースがテレビで報じられるたびに，少年は「『ころな』じゃない」と怒り，「学校で新型コロナウイルスと書かれた配布物を友達に渡すのがつらい」と漏らすようになった。

そのことを母親の知り合いがフェイスブックに書き込んだ。山田さんたちが送った応援歌は「しあわせになあれ」（弓削田健介作詞・作曲）。それぞれの名前には名付け親の幸せになってとの願いが込められている，と伝える歌である。

「うれしかった。今は自分の名前が好き」と村越くんは言う。山田さんは「コロナに打ち勝つ，といった言葉が社会全体の共通認識になる中，傷ついている人がいることに多くの人に気付いてほしい」と語る。

WHO は 2020 年 2 月 11 日，感染症の正式名称を COVID-19 とした。しかし日本では，長いからなのか，あまり使われない。その後も名称は新型コロナのままで，「コロナ」は今こうして書いている間もどこかで流れている。しかも「打ち勝つ」対象としてである。自分の名前と同じ音の言葉が，こんな文脈で毎日聞かされたらたまらない。

ころなと読む名前の子どもをめぐっては，こんなニュースも報じられた。2021 年 3 月 25 日の『沖縄タイムス』の記事である。あらましを紹介しよう。

「『先生が大好きです』 小学校でコロナを新型肺炎に言い換えるワケ」

沖縄県糸満市立喜屋武小学校で 24 日，職員の離任式があり，4 年生の平良心音（ころな）さん（9 歳）が天久三千代校長に感謝の手紙を送った。天久校長は新型コロナウイルスの影響が広がる中，平良さんが名前で嫌な思いをしないようにコロナウイルスを「新型肺炎」と呼ぶよう職員や児童に呼び掛けた。平良さんは手紙に「『新型肺炎』と呼ぶ環境をつくってくれてうれしかった。先生が大好きです」と，お礼の言葉をつづった（傍点，引用者）。

天久校長は感染が広がると，2020 年 2 月「新型肺炎」という呼び方を全校朝会で提案した。子供たちもすぐに受け入れた。

平良さんの両親は，感染状況が深刻になるにつれ，「つらければ名前を変えろという選択肢があるよ」と伝えたこともあった。しかし本人は「大丈夫。今のままがいい」と答えた。平良さんは離任式後に校長室を訪れ，「心音という名前は太陽という意味。太陽のように明るいダンサーになれるよう頑張る」と目標を話した。

呼称を変えることで「コロナ」の 3 音が行き交う頻度が減る。そうなれば，その分「嫌な

思い」をする頻度も減る。変更後の呼称を「新型肺炎」としたのもいい。感染症の特徴を言い当てているからだ。

名前「対策」には本人を「励ます」やり方と、環境を変えるやり方の2通りがある。個人でできるのは前者、組織がすべきは後者である。

隠さなければいけない人などいない

COVID-19で亡くなった人は、2021年10月現在、世界中で495万人、アメリカで74万人、イタリアで13万人、日本で2万人にのぼる。人口100万人あたりに換算すると、アメリカ32.8人、イタリア4.5人、日本0.7人という数値である。

『世界』2020年6月号。巻頭グラビアが「COVID-19, A Nation in self-isolation」だった。撮影者はフォト・ジャーナリストのエリック・メッソーリ。写真は8枚。その2枚目が『Gazzetta di Parma』3月17日付の紙面。写っているのは死亡記事面である。

エリックと行動をとともにしたジャーナリスト、ピーター・ウィルソンが一文を寄せる。

「異常事態のなかで重要味を帯びてきたのが、新聞の死亡欄だった。普段は見過ごされがちだったこの記事が、以前よりずっと熱心に読まれるようになったのだ。犠牲者のニュースを知るだけが目的ではない。ここでは、それが死者に敬意を払い、人々が彼らを追悼することができる唯一の方法だからだ。パルマの新聞『ガゼッタ・ディ・パルマ』紙では、昨年3月の平凡なある一日、死亡欄が載っているのは1ページの片隅だけだった。それが今年の3月には、4ページ半全面に膨れあがっている。人々は日々、こんなにも多くの家族が苦しんだ喪失を、重苦しい気持ちで確認する。そして、友人や近所の人が訃報を知ってできることといえば、電話をかけてお悔やみを言うだけなのだ」。

文中にはコンテ首相の言葉も引用されている。「私は、この国が経験しているはっきりと開いた傷口の痛みを感じる」「統計的な数字の背後に、名字と名前、個人史、それに引き裂かれた家族がいる。イタリア国家は苦しんでいる」。

イタリアの新聞の死亡記事欄については朝日新聞も2020年5月25日付で配信している。

「感染者を差別しない国 イタリア紙、実名で犠牲者追悼」の見出しのもと、『コリエレ・デラ・セラ』が紹介されている。同紙は死者が急増した3月から4月にかけて、「犠牲者面」を掲載した。「数字ではなく、ただの名前でもない。顔があり、悼む家族がいる個人だった」とあり、一人一人の名前、年齢、居住地、写真、プロフィールが並ぶ。

3月4日付の紙面には、こんな記事が載ったとある。紹介しよう

認知症の高齢者との人形を使ったコミュニケーション法の研究と実践に長年取り組んできたイーボ・チレージさんが61歳で亡くなった。彼の人柄をしのばせる写真とともに、亡くなるまでの経過を同僚の証言でたどっている。

## COVID-19 と人名

前日の5月24日、朝日新聞は『ニューヨーク・タイムズ』の紙面を紹介していた。「NYTが活字のみの1面1千人のコロナ死者名を掲載」。同日発行の『ニューヨーク・タイムズ』は1面をCOVID-19による死者の名前や没年、一言紹介で埋めた。紙面は前日のFacebookでも公開され、話題となった。死者が10万人に迫るタイミングでの記事である。リード文を引用しよう。

「彼らは単なる名簿上の名前、存在ではない。彼らは私たちなのだ。アメリカにおけるコロナウイルスのインパクトはけっして数字のみで測れるものではない。治療を受けた患者の数であれ、仕事を中断させられた人の数であれ、人生を打ち切られた人の数であれ、みなそうだ。10万人という悲しい節目を目前に、本紙は犠牲者の略歴や訃報を急いで探し訪ねた。ここにかかげる千人の人々は犠牲者のわずか1%にすぎない。誰一人、単なる数字ではない」。

紙面は国内各地の新聞に掲載された訃報を再構成して作られた。紙面デザインを統括したボドキン「ニューヨーク・タイムズで40年間働いてきたが、写真や図表のない一面は記憶にない」と語る。『ニューヨーク・タイムズ』はふだんから、COVID-19で亡くなった人たちの訃報を「私たちが失った人たち」と題し、連日掲載していた。最初の3人だけ紹介しよう。「Patricia Dowd, 57歳, カリフォルニア州サンノゼ。シリコンバレーで監査役をしていた。Marion Krueger, 85歳, ワシントン州カークランド。いつも笑顔の曾祖母。Jermaine Ferro, 77歳, フロリダ州リー郡。結婚したばかりの新妻」。